明治三十八年五月一日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

愛をもて眞理を行ひ長ちて凡てのこと首なるキリストに效はしめんためなり(以弗所四〇十五)

第二巻第一號

一周年に際して所懐を述ぶ　社説
十字架上の基督　今井壽道
感化力　井リアム、オクスレーン
聖書研究＝馬可傳　山鹿旗之進
傳道　山室軍平
基督敎青年に望む　渡邊牛次郎
復活日の朝　しづのや
家庭と姉妹　エル、イー、ブレースウエート

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

『明治の女子』は日本基督教女子青年會の創立委員が發行する月刊の聖書研究錄なり。
『明治の女子』は一年分十二冊の定價郵稅を併せて金五十錢。
發行所は東京市麴町區富士見町五丁目廿二番地。
日本基督教女子青年會の創立委員は

委員長 ホイットマン孃
幹事 ワイコフ孃
ツージントン孃
ウエスト孃
津田(梅子)孃
花井夫人
ヘルム夫人
フィシャー夫人
平野孃
小崎夫人
エリス孃
ソーパー孃
フェルプス孃
ハミルトン孃
トリストラム孃
ザーフルー孃
佐藤(錦子)孃
河井(道子)孃
モリソン孃
エー、シー、マクドナルド孃

萬國基督教女子青年會日本支部幹事
同上

明治三十八年四月廿八日印刷
明治三十八年五月一日發行
(定價 一册四錢 郵稅五厘)
(一年分(十二册)郵稅共五十錢)

東京市麴町區富士見町五丁目廿二番地
發行兼編輯人 テー、イー、モリソン
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷所 株式會社 國光社

明治の女子　第二巻第一號　明治三十八年五月一日發行

明治の女子

一周年に際して所懐を述ぶ

流光矢の如く、本誌が初めてわが國に『明治の女子』として生れいでしは、はや一とせの昔とぞなりける。あはれ、嬰兒の初一年、澁舌嬌々として、只僅に匍匐するの能あるのみ。これに向つて偉大なる活動を望むが如きは、固より早計の譏を免れじ。されど我等任にこれが哺育に當れるものにして、尙ほ大にその注意と努力の足らざりしことは、これ深く讀者諸君に謝する處、而かもまたこれと同時に本誌をして大なる過失なく、この過去一年を經過せしめたる神の恩寵を感荷せずんばあらず。

試みに本誌誕生の當時を追想すれば、日露の國交旣に破れて、彼我正に劍光の間に相見え、陸には彈煙相衝き、海には艦艇相擊つの秋なりき、戰へば勝ち、攻むれば占め、帝國の捷利は、今や實に世界の耳目を聳動して、その勢威將に冲天に達せんとす、亦た盛ならずや。而してその功果の及ぶ處、例へば歐米の諸國をして帝國文明の眞相を曉らしめ、從來の誤解を一掃して平等の交際を爲さしむるに至れるが如き、或は敵國民をしてその爲政者の殘忍狡猾なる專制制度を破壞し、以て人權の要求を叫ばしめたるが如き、或は淸國をして上下大にその覺醒を速かならしめたるが如き、固より枚擧に遑あらず。されど我等が茲に特筆大書せんと欲する處のものは、今回の戰によりて、帝國をして、おのれの實力と責任とを自覺せしめたるの一事なりとす。就中大に宗教心の發揮、婦女子の活動とを促したる點に於ては、我等が竊かに欣喜措く能はざる所也。

それ天のわが國民に與へたる大責任とは果して何ぞや。我等は一言にして之を盡すを得べし。即ち我等が世

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

界の文化を增進して、人道の發揮を勉むるの一事にあり。想ふに今後の文明は、獨り西洋の文明にもあらず、また東洋の文明にもあらず、實に世界共通の文明なるべきは、我等の言を俟たずして明か也。果して然らば、東洋の文化を導きて、世界の進運に角逐せしむるもの、これ正しくわが國民の一大責任にあらずして何ぞや。

されど顧つて、詳にわが國の實力如何を顧みるに、果してよくこの大責任を完うするに足るものありや。財政の備不備、實業の振不振、教育の完不完、學藝の進不進、これらの問題は固より大に論究すべきものあらん。されど我等は一たび國民の道德的品位に想到する時に、自ら内に顧みて、肅然襟を正うせずんばあらず。殊に現今の女子青年が、智識藝術の上に、顯著なる進歩發展を爲せるに係らず、その道德的品位の點に於て、未だこれと相伴ふべき理想の發現せられざるは、我等が深く憂とする所也。

我等不肖なりと雖も、この理想の發現に向つて、一道の光明を添へんことは、これ實に平素の志なりき。我等は恐る、第二の國民を造るべき明治の女子青年が速に上帝を知り、基督を信じて、その品性に一大覺醒を與ふることなくんば、將來帝國の使命を圓滿に遂行すべき機會を造り得ざらんことを。

頃者東京にある基督教女子青年會創立委員相集りて、同會組織のために謀る處あり。我等はこの計畫の實現せらるる機會が、遠からず到來すべきを信じて疑はざるもの也。げに『今は恩惠の時也——今は救濟の日也』。あゝ婦女子の活動かくの如く盛に、宗教心の勃興かくの如く熾なるの時、我等にして若し眞に神の使者の如く、發奮激勵、以てその任に當ることなくんば、それ將た何れの機をか待たん。

今日我國に於ける基督教の勢、尙ほ甚だ微弱なりと雖も、或は家庭に、或は學校に、或は工場に、とく信者として樹てる女子青年また決して尠からざるを知る、故に我等はこの際、特にかゝる青年諸君に望む、請ふ諸君、大に我等が平生の宿志に向つて同情を垂れ、以て神國の建設を助成するの擧に出で給はんことを。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歐米基督敎女子青年會の歷史及び現今の狀况に關して
次號に詳かに述ぶる處あるべし

論説

十字架上の基督

今井壽道

これ眞に森嚴崇高なる題目也。犠牲、博愛、公義、苦痛、服從、生死の諸大觀念の集る所、想ふべくして描くべからず、學ぶべくして語るべからず。我等は此の大題目に對して轉た筆舌の無能なるを感ず。

基督が十字架上に苦楚を嘗めしは、凡そ三時間なりき、其間彼は最も深き默想の中にその苦痛を忍べり。『晝の十二時より三時まで暗黑となれり』と福音記者は錄せり、我等この沈默せる十字架上の基督に對すれば、神秘の暗雲今も猶は濃厚なるを覺ゆ。唯だ彼の短き七個の言葉は、堅く閉ぢたる神秘の唇より發せられ、恰も滿天の濃雲僅に破れて、微かに星光を漏すに似たり。されば默想の題目としては、かの沈默せる基督のそれの如く崇高なるものはあらず、七語はこれ此神秘を探るべき微光たるのみ。十字架上に沈默したる基督に就ては、今これを玆に述べず。唯かの七語に就て、此大題目の一部を描くを以て足れりとせん。

(イザア書五十三章の如き、詩廿二篇の如き本題目に關する福音書の記事と共に考究するを良とす。)

○第一語――父よ彼等を赦し給へ、彼等その爲す所を知らざればなり

十字架は平かに地上に置かれて、基督の躰は其の上に押つけらる。長き鐵釘は左右に引張れる掌と、引延ばし重ねたる足の甲とを貫て、十字の木に堅く彼を附着せしめたり。かくて十字架は起され、その足は造置ける穴の中にゆり入れらる。凶惡なる祭司等は、無情なる群衆と共に痛罵挑戰の叫喚(さけび)をあげぬ。是に於て衆議所にても、ピラトの法廷にても、ヘロデの前にても、堅く閉ぢし基督の口は遂に開れたり。彼は今まで『罪を犯さず、またその口に詭譎(いつはり)なかりき、かれ詬られて詬

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らず、苦しめられて勵言を出さず、唯義を以て鞫く者に之を託せたり』(彼三〇廿二以下)。今や彼は、四面に聞ゆる凶惡無情の聲と、且つおのが躰重のために、筋肉引裂かるゝが如き痛傷とによりて、內に無限の苦惱を受けたり。而も彼が語りし時は『世の罪を負ふ羔』の如く、人類に於ける大祭司長の如く祈れり。『父よ彼らを赦し給へ』……彼は贖罪の犧牲として、仲保の天職を成すべき時機の至れるを知りて祈れり。而して彼は眞に有力なる辯護者、仲保者として赦罪の理由を加へたり、曰く『彼ら其の爲す所を知らざればなり』……罪惡の多くは無知より起る。世上罪の罪たるを知らざるもの甚だ少しと雖も、罪の眞相を明に知るものも亦た甚だ少し。當時のユダア人にして、若し自らその計畫し、遂行したる行爲の何たるかを知り、またピラト、ヘロデの徒にして、若し自らその卑怯なる所行の何たるかを眞に知らば、彼等は固より之を敢てせざりしならん(使徒行傳三〇十七。哥林多前書二〇七、八)それ一言一行の微といへども、他人の心に一大創傷を與ふることあり、又同じく他人より蒙ることあり。假令怨恨恚怒によりて、故らにかく與へしにもせよ、豫め自ら其創傷苦痛を受くる場合を察することを得たらんには、人情固よりその殘酷なる處置を許すものにあらず、況んや極惡なる罪惡に於てをや。人は犯罪以前に罪惡の假裝を觀、犯罪の瞬間に始めてその眞味を知る、これ基督が世人のために祈れる赦罪哀願の理由なり。

我等は須らく自ら罪を味はずして、その罪の苦味を悟らんことを勉むべし。また須らく他人が我等に犯せる一切の罪過に對して、その無知を憐みてこれを赦すべし。これ即ち基督の苦死の功德を自己の有として、これに與るの道なり。

○第二語‖今日汝は我と偕に樂園に在るべし

仲保の大祈禱が完全の犧牲を以て献げられし功德は、直ちに應驗を以て報はれたり。此時一方の罪人は先づイエスの沈默を怪み、次にその忍耐に驚き、更に曾て少しくイエスに關して知り居たる所によりて、その無罪の受苦者たるを悟りぬ。而してこの理解は、彼

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れの頑凶なる心を碎きて悔悟の人となせり。是に於て彼基督に請うて曰く『主よ、汝其國に來らん時、我を憶ひ給へ』……第二語はこの悔悟者に與へられし約束なり。(一)基督が眞面目なる悔改者に對して與ふる約束は、常に明日にあらずして今日なり、救贖の速なるは、また悔改の急なるべきを想ふ。『汝ら今日其聲を聞ば……其心を頑愚にする勿れ』(希三〇七—十三參考)。(二)死の今日に迫れるは、豈に獨り刑場の罪人のみかは。死は常に何人にも近し。ダビデが『我は死を距ること一歩のみ』といひしは、眞に人生の常態を描きて餘蘊なし。(三)イエスに在りて受け得べき死の幸福をもこの言によりて示さる。げにイエスは生時の活理想、死後の同伴者なり。彼はその成就する救贖の現世のみに限らざるを敎へぬ。『我と偕に』……死は孤獨赤裸々の人格が、この世に於ける一切の偶然的地位境遇を脫して、王者乞食と同じく、富人もラザロの如くに排し入るべき暗黑の幕なり。唯だ『我と偕に』の一言を確信依賴し得る者のみ、かの寂寞恐怖の情を去るを得べし。死は僅に寸前の間に在り、故に人は今日宜しく悔改の眞實ならんことを期すべき也。(四)人の眞實に有する『挫けたる心』は、縱令それ自身に於て價値なきにせよ、神は貴き祭物としてこれを嘉納し、基督に由りて現れたる愛に沐浴し得べき資格を有するものとせり。吾人は他人の悔ゆる心を尊重し、また自己も此心を告白するに躊躇すべからず。

○第三語＝婦よ之れ汝の子なり……子よ之れ汝の母なり

惡鬼の如く叫びたる人々は、或は倦み、或は良心病みて去れり。十字架を監視しゐたる兵士等も、或は半酔の間にありつらん。ヨハ子はイエスの母を携いて十字架の下に近きぬ。イエス其母の愛する弟子と共に立てるを見て、この第三の語を發せり。母の愛と弟子の愛とはペラロの血氣よりも强く、群衆の凶惡よりも强かりき。この强き愛は、情をこめたる言葉を十字架の上より開けり。我等この光景を描いて自ら默想すれば、人生の悲慘、人情の眞味、孝道の原則の活如たるものあ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るを感せずんばあらず。而してイエスの言を考ふれば、母が自ら拂ひかねたる苦惱より去らしめんとする告別と、世にありて母子たりし關係の消滅と、悲慘に對する同情の慰めとを表し得て、眞に孝子たるの標本を示せり。大人豪傑にして、一旦天下に志を有しては、時に父母を顧みるに暇なしとするものあり、萬家に殉するの日には、一言其父母家族に及ばずして逝くを壯なりとするものあれど、イエスに至つれは萬民救濟の業として自覺しゐたる所を成すに、固よりその母あるがために死を辭せずと雖も、また同時に彼は孝道恩愛の上に一言なくしては止むこと能はざりき。吾人は之によりて大業公事の間にも、孝道人情の容るべき餘地を敎へらる。加之ヨハネは世の寡孤を委托せられたる社會全體を代表す。彼が師とし、また主とせし基督は今や萬民のために其母に別る、ヨハネが之に代て奉仕するは眞に當然の事とす。今や軍國の日本には幾萬の孤兒と寡婦とを生せり。ヨハネの如く、之を養ひ之に事へて、各自其力を致すは亦たこれ實に同胞の任務なり。殊に養老の道の如き、不生產的事業として孤兒敎育よりも忘却し易き不心得を反省せしむるに足る、豈に啻に軍國の時のみといはんや。マリア、ヨハネの愛は十字架の下に基督の絕倫なる愛と相接近せり。凡そ家族と社會とを問はず、一切の人情は、犧牲の十字架の下に集るにあらざれば偕に立つこと能はず、十字架の記號が人道の記號として千八百年を經過し來れるもの、豈にそれ偶然ならんや。

○第四語＝わが神、何ぞ我を棄て給ふや

天地今や晦瞑、基督の言もまた神秘。情に苦みたる彼は今や靈に惱めり。彼は父よとも叫ばずして、畏懼の念を暗示するが如く神よと叫びぬ。彼は曾て『我と父とは一なり』と斷言せしも今や『何ぞ我を棄て給ふや』と訴へたり。使徒保羅が基督の降世を以て『己を虛(むなし)うし』といへる眞味は、最も眞實に經驗されたるが如し。(此一語に對しては幾多の紙數を要すべし、故に略す)無罪を自覺したる聖き人の子は、今や罪人の如く苦めり。『彼は誠に我らの病患を負へり』。蓋し肉體の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

死は靈的死の標號と云ふべし。靈的死に於て、罪は光明と生命の源（神）と分離す。『死の刺は罪なり』とは此死の苦惱なり、彼はこれをさへ經過して、人をして『死よ汝の刺は何處にありや』と曰ふことを得しむ。而も此神秘奥妙なる苦惱の中にも、彼は我が神と叫びぬ。試煉、困厄、災禍、憂欝の中にありても、神は我が神なりとの確信、更にその勢力を失はず。これ吾人をして萬患千艱を排する忍耐勇敢の源を學ばしむ。

○第五語＝我渴く

靈的の苦惱去て肉體に苦楚を生ぜり、恰も激戰奮鬪を終つて、後始めて饑渴を感ずるが如し。同時にその十字架上の痛苦が死の接近と共に如何に甚しく成來れるかを示す。恰も負傷者が冷水一滴を慕ふに似たり。又彼が如何に謙遜にして自己の弱きを告白するに卑怯ならざるかを示す。彼はストイクの如くならず、武士の如くならず、弱き人間の眞狀を代表せり。而もこの渴はまた救世の渴望とも見つべし。彼は既に負罪の苦を經過し、其贖罪和合の大業の大半を盡せり。彼は其萬民に實現されんことを想うて、切に萬民の靈性に渴けり、『我子よ汝の心を我に與へよ』と箴言記者によりて語られしは、恰もこの時に於ける基督の心なりき、基督の愛に應ずる供物は全地も亦た足らず、赤誠眞率の愛と信とを以て、我等の靈をこれに供すべきのみ。十字架上の救主は人の救濟に渴けり。我等は皆な傳道者たるべし。傳道者の任務は、世界衆生の靈魂を彼に獻ぐるにあり。

○第六語＝事畢りぬ

彼の肉に於ける苦杯の滴々既に飲み盡されて、今やすべての事は成れり。彼が世にありて、血氣の肉體に成すべき所は、聖書に預表せられし如く、今や悉く成れり、是に於て、彼は此言を爲せり。一日過ぎ行きて一日の悔みあり、一年去つて一年の悔あり。人間は常に成すべくして成さゞりしものあるを知り、盡すべくして盡さゞりしものあるを知る。否な、爲すべからざりし所のものを以て、この空費の時間に充てたるを悟る。基督の言は『聖き生涯』の結末なり。人間はこの

生涯を理想とするより大なる理想はあらじ。

生命の長短はさして大問題にあらず。何となれば生命の眞正なる長短は、一日活きて一日の事を終ると否とに存す。寸陰も亦た寸陰の業あり。之を爲し終りて初めて眞に生命の價値あるを覺ゆ。十字架上の基督は人類を代表してこの完き生命を献げたり。我等はカルバリ丘上に其死を學ぶのみならず、また圓滿なる其生を學ぶべし。

○第七語‖父よ我が靈魂を汝の手に托く

『聖き生涯』の語は『聖き死』の語を生めり。聖淨平安の死は唯だ聖き生涯より來る。次に基督が今再び父よと叫びたるに注意せざるべからず。贖罪の眞相は神人和合なり。天下萬民は彼によりて『天に在す我らの父よ』と禱ることを得るに至れり。而して之れ神と人との和合のみならず、人と人との和合なり。父の啓示とその實現とは、即ち兄弟主義の啓示實現なり。眞に『彼は我らの平和なり』。而して神と人、及び人と人との和合一致は、即ち生に在ても、死に於ても共に愛と信任の滿足完成にして、人道の基本なり。基督は今や此基本を置了（すえおわ）りてその靈を父に托せり。かくて彼は十字架上に絶命せり。百夫の長は之を目擊して『眞に彼は神の子』なりと歎じぬ。我等も亦た甚だ疎略ながら『十字架上の基督』の一面を默想したる後ルーソーが許したる言葉を一層謹嚴に反覆することを得べし。曰く『若しソクラテスの生死にして賢哲の生死たらんには、基督の生死は實に神の生死なり』と。

感化力

キリアム、オクスレーン

羅馬書第十四章七節に『我等の中、おのれのために生けるものなし』とあり。これを換言すれば、自己は總て感化力の中心なりといふに同じ。我等はみな各々感化力と稱する一大不思議力を働かせをるもの也。故に我等は今茲に少しく項を分ち、感化力に關して考ふる所あらんとす。

第一　感化力。

人類社會を統率する神のはたらきより一轉して、人間自身がこの働に與りて、その盡す處の方面を考ふる時に、我等が自ら用ゆる機關の中にて、この感化力の如きは、最も有力なる一たることを發見す。それ世に人間の如く移り易く、また感化力に支配せらるゝものあらず。例へばかの油土の如きは、美術家の手によりて、いかやうにもその形態を變ずれども、人間がその同類の感化力によりて變ずるの甚しきに至らず。人は人と接觸するに當つて、必らず幾分の感化力を與ふるもの也、その結果として人は人を作る。人は生れながらにして今日の狀態にあるにあらずして、後天的に作られたるものなり。人は皆一種の合成體にして、これを支配せんがために、その周邊に集れるすべて感化力に依りて養成せらる。我等はある方法によりて、己れと接觸せるすべての力及び生命によりて組立するもの也。人は寫眞の種子板の如し。種子板が少時間ある物體に對して曝されたる後、永遠にその影像を藏するが如く、一旦人が相互にその感化力に觸るゝや、これが接觸の印象は、その種類の如何に係らず、其經歷中に銘記せらる。何人といへどもその生涯を形成するために、感化力の支配を免るゝを得ず。その偉人たると凡夫たるとを問はず、人は絶えずこの力に支配せらる。試みに偉人の傳記を繙けば、かの世界を動かすほどの人物と雖、皆幾多の感化力に養成せられたことを發見すべし。而して是等の大人物を作り出だしゝものを見るに、多くは卑賤無名の人々に過ぎず。これ恰も黃金の像を造るに用ゆる油土の摸型（モデル）の如し。この摸型の軟弱なる、掌中に入れて容易にこれを粉碎し得べし。されどこれに依りて鑄造せらるゝ黃金の像は、遠く幾百年の久しきに堪へ得るにあらずや。

第二、箇人的感化

感化力の畏るべきこと果してかくの如しとせば、我等は愼重に箇人的感化の如何なるものなるかを研究せざるべからず。我等はおのれの接觸する人に向て常に或種の感化—善なるか惡なるか、有益なるか有害なるか、その品性を高むるか或はこれを低むるか、その何

れにもせよ―を及ぼしつゝあるものなるを忘るべからず。我等が他人に與ふる感化は果して如何なる種類のものなるか。我等に接觸する人は、これが結果としてその厚薄の度、善惡の差こそあれ、兎も角その性格に一種の感化を蒙るもの也。我等はおのが感化力を以て、隣人朋輩親戚を或は益し、或は害しつゝあることを知る。二年前のことなりき。おのれ海濱に行きて、砂上に印せる他人の足跡を追うて歩きしことあり。然るに我が周圍にある數百の人も、また毎日わがその時に爲しゝことを繰返しつゝある也。彼等は前者の足跡を失はじと心して辿り來る。我等は果して後者を何處に導きゆくや。その道の曲直を問はず、彼等はこれを辿り來る。我等が他に及ぼす感化の範圍は、到底その際涯を見るべからず。我等がある人に感化を及ぼせばその人は亦た他の人にこれを波及し、これよりかれに移りて際限あることなし。感化は恰も時間の如く、呼び返さんとするもまた及ばず、一たび働ける感化はまた消滅すべくもあらず。これその感化たるや、既に業にその人の性格の中に侵入せるを以て也。

最後に一言せんに、我等が他人に與ふる感化力の大小程度は、正しくおのが人物の實際に應ずる者也。即ち我等がかくあるべしと知る所の者にもあらず。またかくありたしと欲する所の者にもあらずして、我等が現在の人物その者に應ずるもの也。故に若し我等にして神を無みし、汚れたる生涯を送らば、他人もまた我等の轍を踏むの危きに陷らん。これに反して、我等がその生涯に於て神に近づかば、他人もまた我等に習はんのみ。故に姉妹諸君にしてもし神を離れて、その日を暮しゐ給はゞ、請ふ速に神の許に歸れ。我等は神の與へたまふ力と助とに依りて、初めておのれの感化力をその當に然るべき方位に向け、神聖にして有益に、他人の品性を誘掖することを得べし。諸君は基督教信者なるか、果して然らば、親しく神と交はりて、聖くしてこれに事へ、基督のみ跡に從ひて、他人をして神のみ許に慕ひゆく道を知らしめ、且つおのれの感化が、上帝と正義とのために一大勢力とならんことを勉むべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聖書研究

馬可傳十章四四―四五

山鹿旗之進

此所に記されたる教は、彼の馬太廿〇廿にあると同じ事にて、ヤコブとヨハネの二人が自餘の門弟子に拔掛して榮達せんと欲せしなり。馬太の方には母を以て其願意をイエスに通ぜしかども、此所には彼等自身に願へるなり。此事早くも他の弟子に聞えければ、憤懣の情やる方なく、弟子達の胸中互に他を凌ぎて、我れこそ第一の首位につくべしと銘々煩悶せるとき、基督は之を不憫に思召し、無下に其野心を叱責し給はず、而かもよく之を利用し、向上せしめて、『爾曹は求ふ所を知らず』と仰せて、『また爾曹のうち首たらんと欲ふ者は凡の人の僕とならん』と教へ給へり。數多の人々の上に立ちて采配を振廻す者必ずしも大なるにあらず、眞正の大とは其配下のものに骨身を惜まず盡すにあり、謙虚人に下るにあり。我を捨てて他を顧るにあり。彼の尊大に構へて他に臨む如きは小なる者なり。

尚ほ此意義をして一層明確ならしめんとて、基督は只言葉にて教へ給ふのみならず、御自身を以て其好適例を示めし給へり。言語上の説明なればこそ誤解もあれ、御身を以て之を説明し給ふに於ては、其門弟子たる者爭でか感奮せざるを得んや。我等が感謝すべきは此罪惡によりて曇れる我等の心に、よく了解し得るやう御自身の生涯を以て、實物の教育をなし給ひし事なり。『蓋人の子の來るも人を役ふ爲に非ず、反て人に役はれ、且多くの人に代り、その命を予て贖とならん爲なり』と云ふに至りては、我等罪ある人間の口にては、容易に讃美の辭を見出す能はず。後使徒等が身命を抛ちて、福音宣傳に盡したるは之がためなり。

馬可傳十一章廿―廿三

イエス其弟子等を隨へて、ベタニヤを出で給ひし途すがら空腹に感じ給ひければ、路の邊に青葉の茂りて左

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も果實の累々たるものがありさうに見えたる無花果樹に立よらせ給ふに、葉の外何物もなかりければ、外見美にして其内の空なる彼の僞善者にもよく似たりければ之を咀ひ給ひたり。翌日同じ途を過ぐるに、根枯れ居たりければ、氣早のペテロは早くも之を見て、前日の事を思ひ出し『先生見そなはせ、無花果樹はあのやうに、根より拔たり』と、餘りの事に意外の感に打たれたり、左れど少しく思へば何の不思議かある。彼のユダヤの敎師達は世道人心の先達を以て任ずるものながら、只徒らに見掛け倒しのみ、果實なき無花果樹のみ、其忽ちに咀れて果實を結ぶ事能はざるに至りしは固より其分のみ。

基督は、此無花果樹の奇跡を見てあるまじき事のありしやう驚きたるペテロを敎へて、信仰より出る祈禱の秘義を明にし給へり。自然界を左右し給ふ神が心靈界を支配し給ふは當然の事にして、其間に些の難易なることなし。信じて疑なきに於ては、山の如き障碍も尙ほよく之を取除くを得べし。自然界の無花果樹の奇跡を愕けども、心靈界の奇跡には更に數等の驚くべきものなくんばあらず、打てども押せども嚴として山の如き罪惡も、キリストは之を赦すのみならず、又よく之を取去り給ふと仰せ給へり、要は我等の信なきにあり、疑心の深きにあり。願ふ處は我等の祈禱が、常に誠の信念より出でゝ、假染めにも二足ふむが如きことなからん事なり、かゝる薄弱なる信念の人は、山の移りて海に入らぬは愚か、木の葉の一も動かすこと能はざるべし。

馬可傳十一章二十九

これは或る學者がイエスの答ぶりに感服して、卒で我も此こと問ひて其智識のほどを試みんとせしものに答へられしものなり。當時の聖書學者は、肝辛な實賤躬行などは二の次ぎとし、徒らに六かしき文字の解釋や、辭句の說明などに要らぬ脳力を費して其智識を衒へるものなり。左れば今此問を發するに當りても、心底より之を聞て守んとするにはあらず、左れど此イエ

スの答は千秋萬古渝ることなき大切の教にして、人間の守るべき一切の誠の最大なるものは唯一神を信ずるにあり。心身共に我有たるすべてを傾けて事へ奉るにあり。『主なる我儕の神は即ち一の主なり』となり。

天に二日なく地に二王なしとかや。眞なればこそ一なれ、眞に二あるべきやうなし。天地萬有を創造し、又之を統べ治め給ふ御方は、一柱のまことの神に在すなり。左れば人間たる我等の本分多きも、其は皆この神に對する識分より割出したるものにて、萬流の注ぎて海に入る如く、人間のあらゆる務めは、何をなさうとも皆神に對して爲すにあり。心を二にして神ならぬものに神とし事え、道ならぬものを道とし守るは罪なり、神に對する罪なり。彼の忠臣二君に事へざる如く、貞女兩夫に見えざる如く、此一柱の眞の神に全心全力を盡して事へ奉るべく、此我なる人間と神との間に、何者も第三者を入るべきにあらず。聖書の或る所には、此邊の理合を彼の夫婦の間柄にもたとへられたり。要は神に事ふることを忽せにして、人に事ゆることは出來ぬことなり、天倫を重ずるものは人倫を貴び、人倫を輕しで天倫を盡せりと思ふは僻事なり。

馬可傳十三章卅四—卅七

前より引續きの意義は、世界の終末とエルサレムの没落との事にて、其果して何れの時に來るかは只徒らに人間の好奇心を滿足せしむるのみにて、我等は之を知る必要なし。左れど我等の夢にも怠るまじきは、警醒と祈禱に在るを教へ給ひしなり。而して其意義を一層明かならしめんとて此譬を語り給へり。

基督の昇天せしは、さながら一家の主人が遠方に旅行するとき、其留守中婢僕どもにそれ〳〵の役目を命じて、銘々其本分を盡すべきやう云ひ置きたるにも似たるかな。(一)家の主人は遠行せしかど必らず歸來すべし。而して再び歸り來るときには、其婢僕に申付け置きたる仕事を吟味して、彼等の勤怠を取調ぶる事あり。(二)されど其何時來るかは知りがたし。豫じめ其時を知らさぬは我等が常に油斷せぬため主人の賢こき計らひ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なり。夕方なるか、夜半なるか、將又夜あけなるかも知れず。世界の終りとエルサレムの滅亡に於てもさることながら、我等個人の生涯の終りも亦然り。老少不定は世の習とも云ひて我等が天に召さるるは年齡の多少にはよらず。健康なりとて、年少なりとて、毫も油斷すべきにあらず、常に神に見え奉る準備こそ大切なれ。(三)主の再臨のとき、衣帶を解きて熟眠し居らば如何にぞや。主今來ませしと聞けども直ちに應と云ひて迎へ奉ること能はざるべし。身支度を崩さぬ事と、間睡せぬを肝辛とす。(四)主の來ますは突然なり。婢僕のよもやと油斷し居る時、思ひ設けぬ時なり。豫告して家宅に侵入する盜賊なきが如く、主の來るは意外なりと心得て用心すべし。(五)警醒と祈禱とは汝等四人即ちペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレに命ずれども、其實十二の使徒に命ずるなり。否な世界萬國の基督信者たらんものに命ずるとなり。左ればすべての信者たらん者は常に油斷なく用心して、主の何時に來ますも我れ此所に在りとて直ちに之を迎へ奉るやうあらまほしき事にこそ。

講演

傳道

本文は救世軍の少佐山室軍平氏が、過日某會堂に於て述べられたる說敎なり。おのれ幸にも、その集ひのうちにあり、親しく是を聞きいたく感激せり。さればこれを親愛なる會員の君達にもらしまつらばとて、心に殘れる節々をかくは記しつ。

會員の一人

今日は傳道と云ふ題目で御話し申さうと思ふ。而して聖書の中から強て適當な句を撰ぶならば、猶太書廿三節の「或者をば火より取出して救ひ」……此の火の中に苦しんで居る人を救ひ出すと云ふのである。そして只今申上げる傳道は專門家に就てゞなく、信者たる者は、男女老若貴賤貧富の別なく、皆傳道すべきであると云ふ事をお話しするのである。尤も短時間なれば、委しく話す事は出來ないから、便宜上題目を二分し、第一に我等は何故に傳道すべきかと云ふ事を述べて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眞に御同樣が傳道をせねばならぬものなら、第二に如何にして傳道すべきかと云ふ、所謂その方法について少しばかりお話しやう。

一、我等は何故傳道すべきか

之を説明するには少くとも五つの理由がある、即ち

(1)信者が傳道するは人情の自然である。

何んでも自分の罪の深い事を悲み、どうすれば救はれやうか、どうかして潔められたいと願つて居る時、神の福音に接し、召されて罪の中から救ひ出され、神愛の兒となり、天國の世嗣と云ふ最上な特權を得たならば誰かこの大なる喜悦をつゝみ得やうか、かの馬可傳第七章に記されてある啞人の事をお考へなさい、彼女はキリストにいやされた時に、これを多くの人に告げてはならぬと命ぜられた。然るに彼女は生れて初めて口が利ける樣になつて、嬉しくてたまらないので、遇ふ人毎に其の喜を告げまはつた。尤もこれはキリストの御命令に叛いておりますが、然し一方から考ふれば、人情の自然で、無理もない事と思ふ、之と同じ樣に、私共は眞に神樣に救はれて、心中にいひ難き喜悦と、無限の平安を抱くならば、どうして之を人に吹聽せずに居られやうか、實に是は人情の自然で、喜憂共に人に分つのである、然るにもう自分ばかり幸福を受け、歡喜を得ながら、他人にこれを傳へぬならば、その人は極めて利己の人である、他人の滅亡に落ち行くを見殺しにする不人情極まる人と謂はねばならぬ、もし吾人が多くの小供の中に只一人でも啞の小供を持つたならば、如何でせうか、私共は必ず他の小供に勝つて、其の子を不憫に思ひ、いとしがるであらう、それは人情です。私共が神樣の小供となりまして、もし恩を受けたことを證言する事が出來ない啞であるならば、神樣の御悲しみ御苦痛はどれ位であらうか、人間でさへ啞の小供を持つ事はひどい苦痛であるとすれば、神樣の御悲痛はどの位か知れないのである。御同樣に神樣の啞の小供ではないだらうか。

(2)無上なる神恩に對し、せめて萬が一の御報恩であるから。

御同様に神様より。何とも申し様のない程の御高恩をうけて居る、人は隣人から些細な品物をかりても直に夫を返すのである。また一寸世話になつてもそれに報ゆるではないか。そして實に此が人たるの道である、これと同じく神様に對しても大なる愛の負債があるのに、夫に報ゐないで、人たる道が盡さるゝであらうか、もし御報恩をせなければ、實に濟まない事ではあるまいか、實に私共はあらん限りの力をもつて、出來るだけ報恩をしなければならぬ、そして傳道する事は、實に報恩の一部分である。以前米國に奴隷の賣買が行はれて居た時に、ある紳士が市場を通つた處、多くの人が集つて、黑人の娘をがや〳〵いつて買つて居た、夫で此の紳士は不圖立ち止つて見ると、其の娘を五十圓、六十圓、七十圓と大勢が競買をして居た。時にかの紳士は心の内に思ふやう、とても自分は此處にゐるすべての黑人を買ふ事は出來ないが、せめて此の娘だけなりと助けてやりたい、そして然するが確に自分の義務であると思ひましたから、己れも此の競買者の群に加はり、人が八十圓と云へば九十圓、百圓と云へば百十圓と云ふうちに、遂に二百圓、三百圓となつた、此の樣を始終見てゐたかの黑人の娘は、どうしてまあ此紳士は私のためにこんな多くの金をかけるであらう、萬一此の人の手に落ちたら如何なる目に會ふだらうかと、心も落ちつかぬのであつた。その内に到頭その紳士が買ひとつて、その娘に云ふ様「さあ、汝は今日から自由な身となつた故、何處へなりと往つて好きな事をするがよい、私は只汝に自由を得させたい爲めに買つたのだから」と云へば、娘は丸で夢を見るやうな心地して、その紳士の言葉を信ずる事が出來なかつた。併しまた一方では餘り嬉しいので、紳士の顔を仰ぎ見れば、成程温顔で惠深さうな人であるから、初めて眞にうれしくなつて、涙を流して大地に平伏していふのに「あゝ、何としたお情深い次第でせう、私は何とお禮を申していゝかわかりませぬ、併し旦那、私は只今自由の身となりましても、何處へも行く事は出來ませぬ、何卒此の上の御慈悲に、私を御宅の下婢と

して生涯如何樣とも御使ひ下さいませんか、是が只私のお願ひで御座います」と、遂に紳士の家にて忠實に働き、その生涯を終つたさうである。何と美譚ではありませんか。私共は又汚なく、疵なき神の子と血といふ高き價を以て買はれたのであるから、私の心身はもはや私自身の者ではない、故に私共もこの娘の樣に神樣の御前に出て、何卒御心のまゝに御用ゐ下さいませと申出で、神樣の爲めに生涯出來るだけ忠實に仕へ、せめて萬分の一の御報恩をすべきではないか。

(3)未來に殘る唯一つの良き働なれば。

御同樣に現世で色々な働をしておりますが、それは眞にこの世にあるためのみで、來世に行けば皆消えてしまふのである、併し永遠不易の働が只一つある、即ち人に善をなす事である。殊に傳道のために働くのである、即ちキリストの御心を體して人を救ひ、神の國を來たすために盡すのである。人は眞に此の働の多寡によりてこの世に於ける價値が定まるのである。私共は如何なる職業に從事するにしても、凡て傳道の心を以て之に從ひ、折さへあれば人を救ひ導く爲めに力を盡さねばならぬ。

(4)傳道する間に不知らず〳〵自分も進歩發達をするから。

これに適當な例がある。ある嚴寒に米國のある州で、貧兒が赤子を脊負つて、徒跣で雪の中を歩いて居た。其の時一人の紳士が通りかゝつた、その有樣を見てあまり不憫に思ふたので、其の子を呼び止め、「あゝ汝は寒いのによく小さい子供を世話して感心な子だ」と同情をよせた處が、其の子は「はい、併し私がかうして歩きますと、この負うて居る赤子はあたゝかで、又私も此の赤子を負うてゐるために、背が暖う御座います」と答へたさうだ。又一旅客がアルプス山脈を通過してゐる際、折あしく大雪にあひ、歩む事が困難になり、時間は段々進んでゆくのに、寒さはいよ〳〵烈しくなつて來る、食物さへ盡きてしまつた。夕方になつて如何する事も出來ない。その時この人はあらん限りの勇氣を皷舞して進んだが、遂に何かにつまついて倒れかゝ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つた、あゝと云つて、つまづいた足もとを見れば、こは如何に、己より先きに旅人が倒れてをつた、後の旅人は、今や自分の飢や寒さを全く忘れて、只其の行倒人を助けやうと決心して、力一ばいその身體を摩擦してやつた。暫時して遂にその人は蘇生した。あゝその時彼を助けた人は如何に嬉しかつたであらう。そこで初めて自分にたちかへりて見ると、自分は先刻から力一ばいで摩擦したものだから全身に汗をかいて、大元氣となつてをつた、それで彼は蘇生した旅人と共に遂に目的地に著いたさうである。

　靈魂上のこともまたかくの如く、人を救ふ爲めに働くとは即ち自分の救を保ち、之を全うする所以であります。

(5)自身が傳道せねば、どうしても救はれぬ人があるから。

　世の中には多數の傳道者がある故、私共素人は傳道する必要がありませんと云ふ人もあらうが、それは違います、能く御自身の周圍を御考へになつたら是非自身で御導きにならねばならぬと云ふ方があらう。

　私の知人で只今東京に住つてゐるものがあるが、此の人はずつと以前に種々な罪を犯して、放火までもやつた、そして終身懲役となつて北海道に送らるゝに至つた。其の時に養母なる人が尋ねてゆき、色々悔い改めるやうに説いた末、小さな聖書を一冊與へて「どうか此の本を讀んでゝ眞人間となつて呉れ」と云つて別れました。其後囚人は北海道に送られて次第に惡心ばかり發達したが、或る夜の夢に、自分の枕邊に一少年が來まして手に一冊の書物をもち、彼に對つて云ふには、「此の本を讀んで眞人間におなりなさい」といつてその姿が消えてしまつた、餘り不思議だから眼を開いて見たが、何の姿もない、而してかの童子が持て居た本は前年母が贈つて呉れた本と同じであつた。之を思ひ合せて見れば、今迄荷物の底になげこんでをいたが、一度それを出して讀んで見やうと云ふ心が起つた。然し悲しい事には彼は惡筆の外、本をよむ事など少しも知らなかつた、それで先づ「いろは」から習ひ初めて、遂に自分で聖書が讀める様になり、一たび自分の罪深き

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事をさとり、遂には全くこれを悔ひ改めるやうになつた。それで初めは終身懲役であつたのが、餘り品行がよくなつたので放免されて歸つて來た。彼の養母は彼に聖書を與へたのち、毎日神樣に彼の事を祈つて居たさうである。

要するに私共は右の五ヶ條の理由によつて是非とも、傳道をせねばならぬのである。是から如何にして傳道すべきかを簡單にお話しやう。

二、吾人は如何に傳道すべきか

夫についてざつと四つの個條を申し上たいと思ふ。

(1)おのれの家族を救ふべきこと。

私共は其家族を救ふ爲めに力を盡さねばならぬ、そは中々困難な事である、口で云ふた丈で出來る事でなく、殊に自身の行動によりか、祈禱により平常の心づくしに由てのみ成功すべきである。家族を救ふ事は私共の本分である。之を牧師傳道師に任せ、友人に委ねをくべき事でない。キリストは「レギョン」につかれたる人を救ひたる後、「汝の家に歸り親族にゆきて、主が爾になし、大なる事と、爾をあはれみし事を告げよ」と仰せられた。西洋の諺に「愛は家より始む」と云つてある。私共は其の家族の救ひのために、あらゆる力を盡して働かねばならぬ、而してこれには殊に根氣よく祈り、又身の行ひを以て之を感動せしむるの必要ある事を忘れてはならぬ。

(2)次にその同輩知人の救の爲に力を盡さねばならぬ。

私は先頃英國の或る新聞にて一人の感ずべき工女の事をよんだが、この工女はその行がよろしく、信仰が篤い故、主人が感じて此度新に設立したる分工場の女工の取締に任じ、給料も多く拂ふ事にして、その旨を通ずると、工女は之を辭退し、態と給料も少く、働きも劇しい方の工場に於て、普通の工女として勤めを繼くる事を願つた、其の理由は目下自分と一所に働く工女達に救の道を示して、これを罪より救はむものと、毎日晝飯の後や、又たは朝夕の途上などで話してゐる最中故、も少しその結果の見ゆる迄は、此の儘にして居たいと云ふ積りであつたのである。果して是から一

年の間に此の工女に導かれて信仰を起し、信者となつたものが四十人程この工場のうちに出來たと云ふ事である。即ち此一人の工女は、僅かの給料と位置とを棄て、「全世界より尊き」四十人の靈魂を救に導いたのである。私共は友人同輩を導くために働かねばならぬのである。

(3)次におのれの屬する教會のために盡さねばならぬ。

集會に出るのは只面白い說教を聞くためでない、また人を救ふために集るのである。グラッドストンと云ふ人は、どんな下手な說教でも何か得る處がある、下手な說教でも我慢して聞けば少くとも、忍耐を養ふ事が出來るといつて居たさうである。是位の覺悟で居たならば、不平なしに教會に出る事が出來るに相違はない、色々な不平を並べて集會を欠かす人々を戒めたる或る人の語に、「皆んなあなたの樣な事をいつて、あなたの通りの眞似をしたならば、これで神樣の國が出來るかどうか考へて御覽なさい」とかいてある、私共は徒に不平など云つて信者の務を怠る事なく、却つてさう云ふ不平でも云ひたい樣な事があるにつけ、ますます奮發して二人前も、三人前も働き、祈り、盡し、其の教會の欠點や、弱點を補ふ樣に務めねばならぬ。私共は教會を守り立て、己が屬する教會を中心として、世の救のために盡す心掛が必要である。只の信者の一言の傳道や、一寸した親切なる行は、時として宗教家の念の入つた働よりも、餘計に人を感ぜしむる事があるのであるから、充分勵んでお盡しになる事を望むのである。

(4)最後に大切なる事は一人々々を救ふ爲めに盡す事である。

基督は一時に數千數萬の人を相手に說教なされた如き事もあると同時に、また屢々僅か一人の人を救ふために非常に御盡力になつてをる事を見るのである。即ち「人若し新に生れずば」云々との貴き教は、只一人のニコデモを相手に說き玉ふたる教であつて、また「活ける水」の意味深き喩は、井側にて僅か一人のサマリヤの女に說き玉ふたる教である。私共は一人の靈魂を重

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んじ、これがために働かねばならぬ。若し茲に一人の熱心なる信者があつて、今年一人を救ひ、救はれたる人と心を合せて、明年更に一人宛を救ひ、斯くして一人が毎年一人宛をキリストに導くならば、今年は一人明年は二人、明後年は四人、明後々年は八人と云ふ勘定で、つまり僅か三十二年間に全世界の人類を殘らず救うて尚ほ餘ある勘定である。昔辨慶と義經と一緒に御飯粒をねつて糊を作つたと云ふ話がある、其の時辨慶は力に任せ一度にお鉢一杯程の御飯をこね廻した。併し義經はやさ男であつたから、竹べらの先きにて一粒づゝをねつたが、つまる所おそい樣でも、義經のねつた糊は用にたつたけれど、辨慶のは大騷をしたきりで糊としては更に何の用もしなかつたと云ふ事である。私共は假令、數百千人を相手に大說敎をなし、又は大文章をかいて、一度に世間の人を感心させる力はなくとも、自分の手にあふ位の人間を相手に一人づゝ話をする分には隨分やる事が出來る。と云つて實際は其の方が却つて有功で、却つて大なる御榮を揚ぐる事になると思へば、お互にます〳〵勵んで、各々己が立場々々から世の救のために力をつくさねばならぬ、どうか、どなたも聞いた所を神樣の御助けに由つて直ちに實行する樣にお心掛け下さらん事を願ふのである。

藻　鹽　草

基督教青年に望む

渡　邊　牟　次　郎

われ若し一個の特權を得て、萬國歷史の中、おのが欲する時代に生れ、おのが欲する國家に生活することが出來るとすれば、われは現代の日本に於て、一個の青年として生活したいのである。即ち一方には歐米の諸友國と相携へ、他方には東洋の諸國民を相率ゐて樹てる日出國、特に今日すべての方面、すべての事業を通じて天の榮光と恩寵とを發揮すべき機會に滿ちみてるこの國に生活したいのである。若しそれ前途大に爲すあらんとする青年會の一員として生活するが如きに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

至つては、わが最も光榮とする處である。飜つて想ふ我等は軍國の青年として、滿州の草むす屍、旅順の水づく骸となつてゐたのかも知れぬ。あゝ、何故われは今茲に生存してゐるのであるか、これ實に神の命でなくてはならぬ。一擧手一投足も、主の指導による時には、確かにその中に一片の意味が存せなくてはならぬ。

それ青年は活氣に富み、希望に滿ち、智識を追求し時間は自由になる、或は辯舌に長じ、或は文章を能くし、爲さんと欲して爲し得られないものはない。而して我等青年の心意を支配するものが唯二つある。即ち一は我等を低く押下ぐる惡魔で、一は我等を高く引上ぐる聖靈である。されば我等は基督の慈愛に浴して、常にその高潔なる品性を仰ぎ、日一日に『新生命』の妙域に進むべきものである。完全なる自己の發展とはこれを云ふのである。

世に憐むべきものが多くあるが、侏儒の如きは最もその大なるものである。二十歳若くは三十歳に達しても、生理上病魔のために成長することが出來ないで、二三尺の不具な體軀をしてゐるのである。我等私かに現代青年の精神的狀態を見て、かの侏儒の如き悲境にあることを認めるならば、その病源を究めて、これを救ひいだすのは、確かに我等の使命ではあるまいか。かゝる青年こそ、實に一杯の冷水を得んともがく所の渇者である。

われ舊約聖書を讀んで、かの三千五百年の昔、モーゼがその前代未聞の大活躍を了りて後、天に召さるゝ一段に到に毎に、肅然として襟を正さゞるを得ない。

『モーゼかく行へり。即ちエホバの己に命じ給ひし如く、すべてこれを成せり』

我等にして若し今夜にも神に召されなば、果して如何。我等よくモーゼと共にみ前に立つことが出來やうか。あゝ『實行』なるかな、我等空想に耽りやすき青年は、特にこの二字を銘記して、その天職を完うすることを勉むべきである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

復活日の朝

しづのや

夙めて起きいづれば、夜來の雨全く晴れて、心地すが〳〵し。

試みに東臺の邊に步して、靜に主の復活を追想するもよからずやと、飄然門を出づ。

朝靄低く山下を罩めて、池畔未だ人影なし。櫻花最も濃なる處、幽に曉鐘の響を聞く、石階を上りて左に向へば、老幹古枝、新しき花衣を裝ひて、うつくし〳〵ともいはん方なし。

頭を回せば、大なる東京は、未だ昨夜の眠より醒めざるが如し。いでや、花下蔭にしばし憩ひて、この靜境を樂まむかな。

想は既に千八百年の昔に走りて、身はいまマグダラのマリアと共に、主のみ墓を訪はんとする途上に在り。

殘月光を失うて、東天なほ未だ暗し、遙に園中を望めば、衞士の姿のをちこちに動くを見る。花間の露をおし分けて主のみ墓に近けば、こはそもいかに、墓門を蔽ひし石まろび出で〻、主の亡骸を求むれども無し。マリアうち駭きて、手をその胸にあて、

『わが主を奪ひしものあり』

いひつ〻、ふり返りみるに、人あり、傍に立ちて曰く、

『婦よ、何ぞなげくや』

『爾もし主をはこび移せしならば、何づくに置きしや』

『マリアよ』

いぶかしや、こはたしかに主のみ聲なり、婦初めてその甦り給へるを知り、跪いてその足を抱きぬ。

あゝ、主の復活のこのあした、うれしきかな、たのしきかな。死よ、なんぢの刺(はり)はいづくに在る。陰府よ、いましが勝(かち)はいづくに在る。げに人を十字架につけたる兵卒の劍は、神を屠るにはあまりに鈍かりき。

『復活』――靑春の花にあこがる〻我等は、多くはこの問題を閑却し易し。現在の急務は、我等をして未だ來

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世を慰るの暇なからしむ。されど想へ、しばしも休むことなき時間の手は、我等を驅りて、いつしか墳墓の暗に投ぜんとす。かくてもなほ破るべからざる生命、果してわが衷に在りや、否や。

かつてはこの問題に接して、かのトマスと共に疑惑の雲に蔽はれしわれの、いまはまた彼と共に、もゆる信念の光に照らさるゝに至りしを謝す。

ふたゝび起る鐘の聲に、醒むるが如くわれに歸れば、日正に東林の表にいで、滿枝の花殊に淸し。

家　庭

家庭と姉妹

エル、イー、ブレースウエート

斯る問題に就て論らふことは、風俗習慣を異にする我等に取りて困難な業である。何となれば我等は日本の家庭に於ける姉妹なるもの丶眞意義を知るの知識に乏しいからである、併し苟も眞に基督をおのれの救主と信じ、王と尊び、聖書に示されたる光明の途を歩むものたる以上は、洋の東西を問はず、均しく主にある姉妹として、我等は相互に幾多の同一なる經驗と、困難とに遭遇することであらうと思ふ、それでこゝに少しく姉妹がたの參考までに、卑見を述べて見やう。

抑も家庭生活上、夫婦親子の關係に次いで大切なのは兄弟姉妹間の關係である。此の關係は如何なる姉妹方でも、啻に今日に於て大切なるばかりでなく、將來賢母良妻たるべき準備としてもまた甚だ大切である。若し姉妹方が能く其の兄弟の意嚮を察し、其の必要、誘惑、困難、好惡の幾分を知ることが出來れば、是れ則ち他日夫を助け、子を敎ふるために、多大の價値ある業を豫習しつゝあるものと謂ふべきである。

兄弟姉妹一家に同居するのは女子敎育上大に重んずべきことで、品性陶冶のために缺くべからざる感化を有するものである、蓋し姉妹方は常に兄弟より學び得る機會と兄弟を助け得る機會とを併有し、また勉學と娯樂に對する自己の興味は多く兄弟のそれと同じであ

るから、自然よく其の間の呼吸を解し、兩親でも到底爲し得ないほど、兄弟と興味を共にすることが出來る、勿論家族擧つて基督信徒たる一家に於ては、之を行ふことも割合に容易であるが、家族の中幾人かは信徒にして、其の他の者は信徒でないと云ふやうな場合か、若くは姉妹方が一家の內で唯一人の信徒であると云ふやうな、隨分世に有勝ちの場合には、其困難は實に思ひ遣らるゝことで、往々己れを處するに如何なる道を取つて宜きやを知るに苦しむことであらう、假令一家擧つて或る事を爲す時でも、己れは基督の聖旨に背かぬため、斷じて之に與かるべからずと感ずるやうなことは、日常起り來る事柄でなからうか、此の時こそ實に姉妹方が基督に對して、何程忠實であるかを試みらるゝ大切な時であるから、宜しく馬太傳第十章三十七節に記してある『我よりも父母を愛しむ者は我に協はざる者なり、我よりも子女を愛しむ者は我に協はざる者なり』との基督の聖訓を服膺してもらひたいものである。

前條のやうな場合に臨みて、通例姉妹方の陷り易い誘惑は、これは己れが爲して惡るいと思ふ事柄であつても、家族の上に及ぼすべき自己の外面的感化を思慮し、心ならずも之に從ふの一事である。成る程一家の者が皆擧つて與かる事柄に己れ獨り與からないのは、何となく一家の者と分離するやうな氣持もしやう、その時惡魔はすかさず、姉妹方の耳邊で『斯くては餘り嚴格ならずや、左まで嚴ならずとも、少しは讓步して宜からん』と私語するのである、人を基督に導くことが、唯我等の感化のみで出來得るものであるならば、惡魔の此の私語も一應尤もに聞えるが、併し救主の必要なることを人々に曉らせるのは、聖靈の働であるから、我等が家族のものに凡て眞の助を與へることが出來るのは、唯聖靈が我等を通じて働く時のみである、而して聖靈は我等が此の事を爲しては如何だらうと、懸念するやうな事柄に係はることを決して容赦しないのである。

それで姉妹方に大切な第一の條件は、他人の如何に

關せず、己れは絶對的服從の意義に於て基督に就き、全身全靈を主に獻ぐることである、すると聖靈は姉妹方の日々の生活に於て、其の果を結びつゝ終始一貫して働かれる、茲で聖靈の結ぶ果とは即ち仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、温柔、撙節、(加拉太書第五章廿二、三節)であつて、此等の結果は姉妹方に取つて終生必要なものであるが、就中家庭生活上、一家の者と日々親しく接觸し、斷えず試煉を受くる時ほど必要缺くべからざる時は無い。

靈の結ぶ第一の果は愛である、英國に『愛は盲目也』と云ふ諺があるが、是は元より人性的愛の消息を傳へたもので、靈の齎らす愛は之と大に其の趣を異にし、人類社會の眞相を觀破し得るものであるから、我等が兄弟姉妹の最大必要を洞察し、祈禱と勤勉とによりて、彼等のため實際に最良最善の策を講ずることを得しむるのみではなく、兄弟姉妹に如何なる困難或は障碍をも與へぬやう、我等をして一段の注意を喚起せしむるものである、又靈の結ぶ其の他の果を見るに、何れも皆正道を踏んで日常生活を送るに必要なものでないのは無い。嗚呼我等は各々主にある姉妹として、己れの兄弟姉妹にも亦た救主を知らせやうと切望して居るか、居るならば、彼得後書第一章八節を讀んで見られよ、『此等のもの(靈の結ぶ果)若し爾曹の衷にありて彌增す時は爾曹……實を結ばざること無きに至らん』とあるのは、何たる尊き約束ではないか。

また聖書を繙いて、路加傳第十章三十八節から四十二節までを通讀すると、マルタ、マリアなる姉妹の家庭生活の狀態を瞥見することが出來る、マルタは耶穌を饗應するため、其の準備に忙はしいのに、マリアは更に、マルタの仕事を手傳ふ氣色もなかつたやうに思はれるが、併し是は所謂皮相の觀で、其の實マリアは最初マルタと共に家事に奔走して居つたが、今や好き機會を得て耶穌の足下に坐し、其の尊き聖訓を聽くことの人生に最も欠ぐべからざるを實現したのである、即ちマリアが耶穌に侍して、其の聖訓を聽いたのは、人生の最大急務を先づ第一に置いた所以である。而して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我等も亦彼女の例に倣ひ、何事を措いても先づ耶穌が、自己及び其の聖旨を我等に顯はし得るだけの時間を備へやうと努めれば努める程、我等が家庭の内外に於て益々主の證人たるべき任務あることを、愈々深く確認することが出來る。

世間には基督教的事業と云へば、唯傳道事業の如きものゝみかと誤解して居る姉妹方も往々あるやうであるが、神の我等に望み給ふところは決してさうでない我等が全生涯を通して神に事ふることなので、兄弟姉妹が倶に學び、倶に遊ぶ時にも、又母の忙がしい仕事を手傳ふ時にも、凡ての事みな神の榮を顯はすために爲すべきである。而かも我等は或る大事業を仕遂げやうなどゝ、餘り大なる抱負を懷かず、些事に忠實ならんことを望むべきである、神は婦人の働くべき特別なる傳道地として家庭を賜はつたのであるから、我等は此所に根據を据え、天祐を仰いで各自の天職を完うしたいものである。『神は爾曹をして常に凡ての物に足らざることなく、凡ての善事を多く行はしめんために恩を多く爾曹に賜へ得る也』(哥林多後書第九章八節)。

あめ地の
おなじめぐみに　そだちてぞ
匂ひ出でぬる　人の世の
花にもとまれ　飛ぶ胡蝶
人の世に　つれなきものも　ありときけど
恐れなそ　われはなどてか
友なるなれを　そこなはん
きてもとまれよ　わが袖に
來ても眠れよ　わが裾に

（大西博士）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

with the problems of their Christian life when they are in need of help. There is also a little circle of earnest young women who do something of the same helpful work among their fellow-students as they find opportunity.

One of most cherished departments is the Bible Study Department. The enrollment in the Bible Classes varies from one hundred and fifty to two hundred, and the classes are led by students. The policy is to keep the membership in each class as low as twelve or fifteen, so that the students may each have a definite part in it. Each year the work is started by a Bible Study Rally. where the plan is presented, and by personal invitation from one student to another. The helpfulness of this work can hardly be over-estimated. It is from the systematic Bible-students, that the leaders are drawn for the next year. The class leaders meet together each week to discuss class problems, to discover how they may be most helpful to their classes, and to study and pray together.

The missionary Committee would not accept this as a true estimate of the University Association, if their work was omitted. Each year they hold four missionary meetings and a missionary banquet. These meetings have been a marked success lately. On one occasion—a missionary journey, where curios were shown and the subject of winning others for Christ was presented—there was an attendance of one hundred and seventy. five—Each year a missionary contribution of one hundred and fifty dollars is made, and best of all, some give themselves to missionary work.

There is just one more phase of the Association life which is so vital that it cannot be overlooked even in a hasty summary—and that is the Pacific Coast Conference. Between seventy and eighty of the Association girls go each year to Capitola by the sea to meet with the other College girls of the Coast for ten days. Here is reaped a large harvest for the year's work. Many of the most earnest workers first came to know Jesus Christ during the days at Capitola. Decisions for life work and inspiration for better service are other characteristic features of the Conference. The meetings are so helpful, and the girls have such good times together that no one ever forgets Capitola.

It is a temptation to tell of the entertainments given in the Old Ladies' Home near by and of the Mission Study classes. But in closing, this may be said, that the Association is what it is in influence and in power over girls' lives, because the members are trying in a sane and earnest way to bring them selves and others into a very personal friendship with Jesus Christ.

Mary Page.

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

in an understanding whisper.

The man nodded, It was one of the supreme moments of life when the veil is lifted and there is no possibility of misunderstanding whatsoever.

"We don't know you, or who you are, but now you belong to us," he said.

Ursula smiled again.

"I don't mind, I'm tired, and anyhow, I have no home."—*British Weekly*.

THE YOUNG WOMENS CHRISTIAN ASSOCIATION IN THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA.

The beautiful situation of the University—on the hills sloping down to the edge of San Francisco Bay and facing the Golden Gate—is typical to many of the students of the glad and helpful time they spend there. There are about nine hundred women in the University, and about four hundred of them are members of the Young Women's Christian Association. For a large proportion of these young women the Association brings the dearest ties of their college years, and often either the beginning or the deepening of their Christian life.

It is an interesting thing to see in how many ways the Association touches the lives of the students. Before the Freshmen arrive in the fall, letters from parents pour in, asking recommendations for suitable homes for their daughters. When the girls first reach Berkeley, they are met at the station, if they wish it, or are called upon during the first days. Many a lonely girl has been brought into the range of Christian influence through the friendliness of the girls in the upper classes at these times. Berkeley is fortunate in having an Association Building of its own, and this is a popular center, especially at the beginning of the term, when the new girls drop in for a friendly chat with each other and the older girls. The General Secretary is on hand always with her cordial greeting and frequently is able to be of particular assistance. With a series of receptions—formal and informal, several little parties, and the three great occasions known as "Spreads," the social side is well represented.

But the deeper meaning of the organization is never allowed to be forgotten. Use is made of all the social occasions for friendly conversations concerning the religious work and for inviting the girls to join in it. Twice a week, there are devotional meetings so arranged that the one or the other hour may be convenient for all. We are fortunate in having a General Secretary in whom the girls have such confidence that they will go to her

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

coming right up, and we'll be drowned like the naughty children in the book. Oh, I want Nana and Daddy and Mummy."

Ursula comforted them, they clung about her, forgetting that she was a stranger, only conscious of her kind face, her wet but smiling eyes, her air of protection, her promise of safety and rescue.

And the minutes passed. Talking softly and cheerfully to them, she gathered them about her, and climbed upon the rock, and tried to interest them with a make believe, that they were only story book people, and that presently they should find themselves back on the bents, and that it had never happened at all. Indeed, her own resource surprised her as nothing in her life had yet done. But steadily the water came creeping in. It lapped greedily about their rock when it had swallowed all the sand, and presently it was up to their feet, and the little girl gave a slight scream. But the boy, though his face was dead white, was quite brave.

"Gentle Jesus won't let us drown, Winnie; let's pray Him to put the sea away, and bring us back to Mummy and Daddy."

But it was Ursula who prayed, with her face hidden in the baby's neck as he clung closely to her, too frightened even to cry. It was a curious prayer.

"Never mind me, dear God, nobody needs me or wants me, but save the little children, for their father and mother, for Jesus' sake."

The water was very cold, and she was numb, holding the heavy child with one arm, and trying to keep the two tight with the other. How long could she hold them, she wondered in agony; once they slipped it would be all over. So the dreadful moments passed. But presently there came across the dull gray of the hidden waters the steady beat of an oar. "Listen, darlings," she just managed to whisper. "It's a boat, somebody is coming for us. Hold on tight; here they are,"

Then she remembered no more,

When Ursula came to herself, she was lying on a strange bed, and there were strange faces about her, strange, rapt, eager faces bending down as if the only matter of moment in the world was her return to consciousness.

"Where am I? Oh, are the children all right?"

A sob from the lips of a gray-haired man close by seemed to answer her. "Yes, all right, thanks be to God and to you-you heroine!"

Ursula smiled.

"It was awful; but they won't play there any more, will they?"

"Never; we shall go home to-morrow," said the man, but the woman on her knees by the bed with her face hidden, never spoke.

"Their mother?" Ursula asked

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

way alarmed, interested in what was a phenomenon to her. And just then she heard the voices of the children, and turning her eyes in the opposite direction, saw the red skirt of the little girl making a welcome bit of color among the prevailing gray. As she walked toward them she was surprised to see that they seemed to be quite alone, playing unconcernedly among their numerous sand castles, and taking no heed of the fog. For there was neither cold nor rain with it; it had stolen in very softly, almost as if it sought something stealthily to hide.

There were three little ones, a chubby girl of nine, and her two brothers younger, the baby, a dear, fat mite, making a picture with his clothes bundled about him, and his bare legs paddling contentedly on the west sand.

"Isn't it time you were going home, dears?" she said pleasantly, if a little timidly; "don't you see how thick it has grown?"

"Nana is coming back," said the little girl. "She only went up to the village to buy hereslf a paper."

Ursula nodded, but lingered, determined that she would not leave them until the nurse returned. And glancing round, she saw something in the opposite direction quite away from the sea which gave her a little start. It was the gleam of water, and she realized with a feeling of sudden sick horror that they must be on the sand bank, and that perhaps were already quite cut off. She had often watched the rapid flow of the incoming tide just here, and the quick engulfing of the sand bank with the big rock in the further end, which was almost, but not quite, covered at high water. And they were at least five hundred yards from the dry bents, which the tide could not reach.

She said nothing to the children, but crossed the firm, hard bank of sand, and took her bearings. And sure enough the tide was around them, an encircling band on every side, It was already too broad to leap. She pulled off her shoes and stockings and waded in. But the bank sloped quickly, and in a moment she was almost beyond her depth. Her face whitened, and she looked anxiously around for a moment, not as yet seriously alarmed, because the nurse surely must hasten back quickly, and would undoubtedly bring relief.

She said nothing to the children; in fact she went close to them again, and began to play with apparent unconcern, promising to show them a quite new kind of castle never before seen upon the beach, It answered for a moment, and then the little girl suddenly sounded the note of alarm.

"The sea's all round us," she cried in terror. "Look, Bertie, it's

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

THE FLOOD TIDE.

By EVELYN ORCHARD.

She was a little shop girl of no particular account in the world, enjoying a holiday, hardly earned, by the sea. It was the late Autumn now, and she had dreamed of her holiday all the Summer through. For she was a London girl, and this was her first glimpse of the sea. After much deliberation and study of time-tables and illustrated guide-books, which she had found plentifully at her disposal at the rooms of the Polytechnic, she had decided upon a little place on Norfolk coast, a place not much frequented as yet, though boldly advertised as "coming."

She had never met anyone who had been there, and had the mind to form her own independent judgment. And hers was not a mind to which the attractions commonly accepted as popular could appeal. She was a gentle, dreamy creature, whom circumstances had cast upon the world, in which she was unfitted to strive. But though gentle, she was not weak, her mouth had a firm decided curve, and in the great house where she endured that curious form of martyrdom called "living-in," the long, firm line seldom left her lips. For this reason she was not a favorite, though some of the worst detractors had proved her kindness of heart.

She had found the sea on the whole disappointing. Its vast loneliness oppressed one whose heaviest cross was her own peculiar isolation from her kind.

In it she found no companionship, but rather a sense of shrinking and fear. Its relentlessness and power haunted her, in the night its dull boom kept her wide-eyed upon her pillow. There were very few visitors left at Crampton Cove in the last week of September. Except for a handful of children who regularly played on the beach morning and afternoon, the little shop-girl had it mostly to herself.

The rest had done her good, and though she did not know it, her face looked very sweet under the brim of her cheap sunhat. Yes, it was quite a winsome face. Her book, which she had taken from the village library, had interested her thoroughly for nearly two hours; when she shut it at last she was surprised to see that a change seemed to have come over the spirit of the place.

The sun, which had been so bright when she sat down, had gone; in its place a thick fine sea-fog seemed to have been unrolled from some mysterious background. Across the flat, wet sands came the boom of the waves, and their foamy outline could just be seen. She rose in no

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. II | May, 1905 | No. 1

"WHAT IS THAT IN THINE HAND?" (Ex. iv. 2)

My hands were filled with many things
That I did precious hold,
As any treasure of a King's,
Silver, or gems, or gold.
The Master came, and touched my hands,
The scars were in His own;
And at His feet my treasures sweet
Fell shattered, one by one.
"*I must have empty hands,*" said He,
"*Wherewith to work My works through thee.*"

My hands were stained with marks of toil,
Defiled with dust of earth;
And I my work did oft-times soil,
And render little worth.
The Master came and touched my hands,
And crimson were His own;
But when, amazed, on mine I gazed,
Lo, every stain was gone.
"*I must have cleansed hands,*" said He,
"*Wherewith to work My works through thee.*"

My hands were growing feverish,
And cumbered with much care;
Trembling with haste and eagerness,
Nor folded oft in prayer.
The Master came, and touched my hands,
With healing in His own;
And calm and still to do *His* will
They grew,—the fever gone.
"*I must have quiet hands,*" said He,
"*Wherewith to work My works through thee.*"

My hands were strong in fancied strength.
But not in power divine;
And bold to take up tasks at length
That were not His, but *mine*.
The Master came, and touched my hands,
And mighty were His own;
But mine since then have powerless been,
Save His are laid thereon.
"*And it is only thus,*" said He,
"*That I can work My works through thee.*"

Edith G. Cherry.

Digitized by Google | Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. II May 1905 No. 1

The "Young Women of Japan" is a Bible Study Monthly for young women published by the Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan Price 50 sen a year. Four *sen*, five *rin* a copy. Address 22 Fujimicho, Gochome, Kojimachi, Tokyo.

Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan.

Miss M. A. Whitman, Chairman.	Miss L. Hamilton.
Miss H. J. Wyckoff, Secretary.	Miss K. Tristram.
Miss Ume Tsuda.	Mrs. G. S. Phelps.
Miss A. B. West.	Miss L. Zurfluh.
Mrs. G. K. Hanai.	Mrs. H. Kozaki.
Miss H. J. Worthington.	Miss H. Hirano.
Mrs. V. W. Helm.	Miss S. Ellis.
Mrs. G. M. Fisher.	Miss E. M. Soper.
Miss Kin Sato.	Miss Kawai.

Miss A. Caroline Macdonald }
Miss There a E. Morrison } Secretaries of the
World's Young Women's Christian Association in Japan.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十八年五月一日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

"That we may grow up in all things into him, who is the head, even Christ." Eph. 4. 15.

Vol. II May, 1905 No. 1

YOUNG WOMEN OF JAPAN

CONTENTS.

English.
What is That in Thine Hand?
The Flood Tide.
The Young Women's Christian Association in the University of California. *Mary Page.*

Japanese.
Editorial.
Christ on the Cross. *Rev. J. Imae.*
Influence. *Rev. W. Axling.*
Evangelistic Work. *G. Yamamura.*
Bible Study. *Rev. H. Yamaka.*
Some Advice to Young Christians. *H. Watanabe.*
Thoughts on the Resurrection. *T. Idzuno.*
The Sister in the Home. *Mrs. George Braithwaite.*

22. Fujimicho, Gochome, Kojimachi, Tokyo.

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA